

木炭自動車



* 県庁戦後B1940年代310「瓦斯発生炉要図」

解説

戦時色が強くなると軍需優先の統制経済のため国民生活が圧迫されました。そのため、金属製品が陶製や木製で代用されたり、衣料品ではスフ（人造綿）が登場するなどしました。

不足するガソリンや軽油の代わりに、木炭から発生させたガスを燃料としたのが木炭自動車です。写真は木炭バスで、従来の車体を改造し、車体後部に大きな木炭ガス発生装置が積み込まれていました。

木炭自動車は、ガスを発生させる準備のため出発までに時間がかかり、また、燃烧力が弱くスピードも遅いものでしたが、民間での石油使用を抑えるため、その使用が奨励されました。

戦後、統制経済が終了すると、急速に姿を消しました。

* 「漁船用木炭瓦斯発生装置二関スル件」（県庁戦前A農業735）や「漁船用木炭瓦斯発生装置経過一件」（県庁戦前A農業740）などの資料は、自動車ばかりでなく漁船の動力源としても木炭が使われたことを示しています。